

## 訂正とお詫び

本誌 2019 年 10 月号 758～769 頁に掲載の、本リレー連載第 1 回「長期予後から見たインプラントマテリアルの課題」(執筆: 吉松繁人先生) におきまして、下記の論文引用上の不備がございました。

### 【引用元文献】

18) Yamada M, Egusa H. Current bone substitutes for implant dentistry. J Prosthodont Res. 2018; 62(2): 152-161.

該当する箇所を正しい表記にて再掲するとともに、引用元論文の関係者の方々に深くお詫び申し上げます。

(編集部)

### 【765 頁: 図 9】

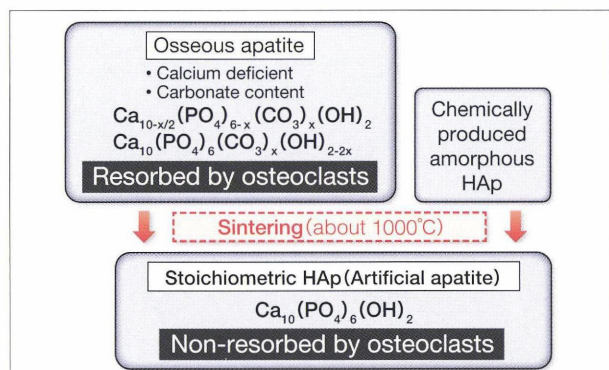


図 9 人工骨は焼成する工程で 1,000°C を超えるものは破骨細胞による吸収を受けにくい結晶構造になる。生物由来の骨補填材料が吸収置換しやすいかどうかは焼成温度の影響を受けやすい<sup>18)</sup>

### 【766 頁: 図 11】

Bone graft materials	HAp content (wt%)	CAp content (wt%)	Chemical or enzymatic dissolution	Acid resistance
Autogenous bone	Young cortical bone: 44 Young cancellous bone: 26 Old cancellous bone: 34	Young cortical bone: 1.4 Young cancellous bone: 0.6 Old cancellous bone: 2.4	Slightly	Low
Freeze-dried bone allograft (FDBA)	49	7.5	Slightly	Low
Deminerzalized freeze-dried bone allograft (DFDBA)	Unknown (theoretically 0)	Unknown (theoretically 0)	Completely	-
Chemically deproteinized bovine bone xenograft (CD-BB)	93.6	3.4	Slightly	Moderate/ high
Thermally deproteinized bovine bone xenograft (TD-BB)	≒ 100	0	Hardly	High
Synthetic hydroxylapatite in porosity-free bulk (HA)	≒ 100	0	Hardly	High
β-tricalcium phosphate in porosity-free bulk (β-TCP)	-	-	Completely	Low

図 11 骨補填材のハイドロキシアパタイト、炭酸アパタイトの含有率と吸収、酸抵抗性の比較<sup>18)</sup>

自家骨に比べ Bovine Bone が吸収しにくいことがわかり、また化学処理した Bovine Bone は熱処理したものよりも炭酸アパタイトの含有率が高いことがわかる

### 【765 頁: 本文 1 行目】

骨補填材を評価するにあたって、図 8<sup>18)</sup> の項目に合わせてその性状を知るのが適切である。

### 【765 頁: 本文 17 行目】

さらに、生物由来の骨補填材料の吸収性は、その製造過程における焼成温度に影響を受ける。生物由来骨を脱タンパクのために 1,000°C 程度で焼成すると、骨アパタイトが破骨細胞による吸収を受けにくい性状へと変化する(図 9)<sup>18)</sup>。理想的な骨補填材料とは、増生部位の体積を保持しつつ骨組織に置換されていく材料である。しかし、そのような骨補填材料の存在はまだ証明されていない<sup>18)</sup> ため、臨床医は骨補填材料の性質を理解して、適材適所に応用する必要がある。

### 【766 頁: 本文 6 行目】

図 10, 11 を見る限り、顆粒型補填材は Bio-Oss, サイトランスグラニュール以外は焼成温度が 1,000°C を超えていることがわかる。Bio-Oss は、焼成温度で 1,000°C を超えないが、水酸化ナトリウムによる脱タンパク処理を受けていることにより、炭酸アパタイトが減少し、破骨細胞による吸収を受けにくい性状へと変化する<sup>18)</sup>。